

## 若きヒュームの思想形成

田 中 秀 夫

### 1. 思想家ヒュームの諸問題

モスナーは浩瀚な『ヒューム伝』<sup>1)</sup> 増補版の前書きで、ノーマン・ケンプ・スミスの言葉を引用した。「いつか、十分な範囲の関心と理解をもった誰かがヒュームをそのすべての多種多様な活動において扱うことを、希望してよいだろう。すなわち、哲学者として、政治理論家として、経済学者として、歴史家として、そして文人として、である。ヒュームの哲学は、こうした多様な形態をとった精神態度として、そのときはじめて、十分かつ適切な射程において提示されるであろう。」<sup>2)</sup>

モスナーの『ヒューム伝』が、このような期待に応えようとしたものであり、その期待を相当まで実現したことは疑い得ない。しかし、その後の四半世紀のヒューム研究の蓄積と成果を考えると、またさらにはコンテクスト主義に基づく思想史研究の進展によって、思想史の景色自体が根底的に描き直されてきたという認識を前提にすると、モスナーの研究も乗り越えられる日を待っているというべきであろう。

すなわち、モスナーの『ヒューム伝』はその詳細で厳密な事実の記述によって前人未到の業績であるが、資料の不足を推測で補っている部分も多く、その後、手紙などの新発見もあり、改訂が必要になっている。さらにスコットラン

ド啓蒙の研究もモスナーの伝記以降に、凄まじいまでの研究の展開があるし、自然法思想と共和主義の研究にも、18世紀の歴史研究自体にもきわめて重要な展開が見られる。しかし、ケンプ・スミスが真のヒュームに迫る方法をどのように展望していたことは、重要である。本論考は、モスナーに依存する度合いが非常に大きいけれども、ケンプ・スミスの示唆に応じて、真のヒュームに迫る試みである。

18世紀のスコットランドのみならず、大ブリテンが生んだおそらく最大の哲学者はデイヴィッド・ヒューム(1711-76)であろう。そのヒュームは、この時代に澎湃として起こったスコットランド啓蒙のなかで育ち、またその中心の一人であった。とりわけその哲学上の著作によって同時代に甚大な衝撃を与えた。またヒュームの政治経済学上の著作も歴史叙述も、そして宗教論も同時代と後世に大きな影響を与えてきた。ヒュームの哲学上の著作が、後世に絶大な影響を与えたことは言うまでもないが、しかし、大ブリテン最大の哲学者はついに哲学教授となることはできなかった。それはスコットランドにとっても大ブリテンにとっても不名誉なことであったと言うべきであろう。とは言うものの、ヒュームのいないスコットランド啓蒙は考えられないけれども、ヒューム哲学の同時代への衝撃は必ずしも肯定的なものではなかったから、それは時代背景を考えるとやむを得ざる結果であったのかもしれない。

ヒュームは、17世紀のオランダへの亡命ユグノーとなって当地で活動したピエール・ベイル

1) Earnest C. Mossner, *The Life of David Hume*, Oxford: Clarendon Press, 1754, 2 ed. 1980.

2) Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume*, 1941.

がそうであったように、懐疑論的傾向によって、当時の大ブリテンにおいて、感銘を与えたという以上により多くの衝撃と警戒を引き起こした。ヒュームは政治論文においては政治と党争における熱狂を批判し、穏健を説いたものの、その哲学は、穏健どころか、きわめて先鋭な懐疑論であった。政治に関して、より正確に述べれば、ヒュームは政治分析・政治認識においても先鋭であり、急進的、根底的であったが、それゆえに逆に政策論においては党派の歩み寄りを説いて、むしろ穏健であることを望ましいと説いた。そのようなヒュームの穏健主義は最初からのものではなく、経験を経てはじめて得られたものであった。

ヒュームは、啓蒙を推進した多くの穏健派知識人(スコットランド長老派教会の自由主義者)を友人としてもっていたけれども、そしてまた第三代アーガイル伯爵に象徴されるように、開明派が政治の実権を握るという当時の世界では稀有の、例外的な国にいたけれども、専門職の地位には必ずしも恵まれず、前述のように、期待した大学の教授ポストに就くことはできなかった。すなわち、エディンバラ大学にもグラスゴウ大学にもポストを得ることができなかった。それは今述べたようにヒュームの無神論を疑われるほどの急進的な懐疑的哲学に理由があった。

スコットランドでは1714年以來、初代モントローズ公爵の率いる党派であるスクアドロンが権力とパトロネジ(恩顧)を握っていた。その地位は1715年に初代ロクスバラ公爵に引き渡されたが、1725年に実権を失うまで、スクアドロン支配下において恩顧授与はエディンバラ大学の学長となっていたウィリアム・カーステアズに委ねられていた。カーステアズは1708年にエディンバラ大学に教授制度を導入すると共に、道徳哲学講座を設けるなどの改革を行った。啓蒙の時代が始まっていた。ウィリアム国王とともに帰国し、国王と名誉革命政権に仕え

たカーステアズ自身が、オランダの初期啓蒙をスコットランドに持ち込んだと言えるであろう。

スクアドロンの支配は今述べたように1725年に終焉し、代わって第二代アーガイル公爵の率いる一派(アーガイル派)に支配権が移った。公爵亡き後、1728年からは、弟の第三代アーガイル公爵アイレイが、ウォルポールの盟友となってスコットランドの統治権をその手に掌握し、忠臣アンドルー・フレッチャー、ミルトン卿(同名の愛国者の甥)を通じてパトロネジを行使した。アイレイは1742年にウォルポールの失脚によって、いったんは権力を失うが、1746年に再び権力の座に復帰し、以後1765年までスコットランドの最高権力者の地位にあって、改革を進めた。第三代アーガイル公爵こそ、スコットランド啓蒙の最大のパトロンであった。「だれかがスコットランド啓蒙の父だとすれば、第三代アーガイル公爵こそその称号に相応しい」とエマースンは述べているが、その判断は妥当であろう<sup>3)</sup>。

その後、1766年から1778年まではどの派も支配権を握ることができず、国王の恩顧は、多くの集団と人々によって配分された。そのなかで、この時期に最も有力となった一派は穏健派知識人であった。有力になったとはいえ、彼らは教区と大学にかかわる恩顧以外には関心を持たず、議会政治にもコミットしなかったが、とりわけ大学の人事には影響力を持っていた<sup>4)</sup>。穏健派知識人をスコットランド啓蒙の中核に置いた研究がシャーによって遂行されたのは、すでに20年以上以前のことである。17世紀から

3) Roger Emerson, "The contexts of the Scottish Enlightenment," in *The Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*, ed. by Alexander Broadie, Cambridge U. P., 2003, p. 16.

4) Roger Emerson, *Professors, Patronage, and Politics: The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century*, Aberdeen U. P. 1992, pp. 5-6.

18世紀の啓蒙の時代への過渡期にあって、スコットランドにおいては教会と宗教が持っていた影響力は非常に大きかった。したがって、長老派のなかに穏健派が登場したことに決定的な重要性をシャーは見たのである。

それはそれとして妥当性を持つけれども、シャーにおいては、政治と法の分野、さらには経済学の成立がいくぶん過小評価されているという嫌いもある。シャーの穏健派啓蒙研究は確かに優れた成果であるが、法曹と公職への啓蒙の影響は余り視野に無く、全体としてのスコットランド啓蒙が十分に把握されたとは言いがたい。啓蒙の中心を穏健派の啓蒙に求めるというシャーの視角は狭すぎると言わざるを得ない。アーガイル、ミルトン卿、ケイムズ卿を、またヒュームとスミスをもっと重視する枠組みが必要であろう。啓蒙派の為政者が果たした役割は大きかったし、成果としては経済学の誕生の意義もきわめて大きい。

スコットランド啓蒙のなかで育ったヒュームは、しかしながら、第三代アーガイル公爵とその忠臣ミルトン卿に見出されなかった。エディンバラ大学では人事は市会 (local town council) の管轄権に属していた。市会は商人と手工業者の寡頭制的支配下にあった。行政官には第三代アーガイル公爵や、学長カーステアズ、あるいは市長ジョージ・ドラモンドのような大人物が影響力を与えることはあった。しかし、彼らが影響力を振るわない限り、市会の行政官の思惑、血縁関係、政治的関係などの要因によって人事は決定されたのである。その結果、デイヴィッド・ヒュームのような輝かしい哲学者が選ばれないという事態も生じた<sup>5)</sup>。

少なくとも 1744-45 年のエディンバラ大学の

道徳哲学教授人事においては、アーガイル派はヒュームを支持したが、この時期数年間は、スクアドロンが権力を掌握していた時期であって、スクアドロンによって講座の人事が支配されており、彼らはヒュームに反対であった。したがって、モスナーもプライスもこうした党派対立という政治的要因でヒュームの教授人事の敗北を説明しているのは何ら不思議ではない<sup>6)</sup>。しかし、アーガイル派の学長ウィシャートはヒュームに反対した。アーガイル派と見なされるハチスンもリーチマンも反対した。したがって、人事は政治的要因だけでは決まらなかった。もっと複雑な要因が絡んでいたといわなければならない<sup>7)</sup>。彼らもヒュームの急進的な懐疑論に不安を持っていたのである。

ケイムズ卿は 2, 3 の著作を世に出していたものの、まだこの時期には影響力を持てないでいた。ケイムズが出世するのは、ジャコバイトの最後の反乱の後である。1720 年代の終わりから 30 年代にかけて、1712 年の牧師任命権法によって、国王と不在地主の権限が強められ、結果として教区は穏健派が次第に勢力を増していったが、そうは言うものの、盟約者の伝統を引く長老派のなかでは、牧師任命権法に反対した正統派 (民衆派) の勢力も依然として強く、仮に関係者の構想のなかにあったとしても、おそらくヒュームに大学のポストを与えるといった恩顧授与は現実に実行できる状況ではなかった。洗神の咎によるトマス・エイケンヘッドの処刑は 1697 年のことに過ぎなかったから、熱

6) E. C. Mossner and J. V. Price, *Introduction to A Letter from a Gentleman to his Friend in Edinburgh*, [1745] (Edinburgh, 1967), pp. vii-xxv. Mossner, *Life*.

7) Richard B. Sher, "Professors of Virtue: the Edinburgh Chair", M. A. Stewart, *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, Oxford: Clarendon Press, 1990, pp. 105-106. このヒューム人事については、改めて、検討しなければならない。

5) Richard B. Sher, "Professors of Virtue: the Edinburgh Chair", in *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, ed. by M. A. Stewart, Oxford: Clarendon Press, 1990, p. 89.

狂と狂信はいつ猛威を振るうとも限らなかった。エディンバラの道德哲学講座人事には、ハチスンが反対に回った。グラスゴウ大学道德哲学教授のハチスンはスミスの師であり、スコットランド啓蒙はハチスン抜きでも考えがたいが、ハチスンは微妙な判断をしている。穩健派の嚆矢の一人とされるハチスンは福音主義者の主張する民衆の牧師選任権を退けたが、同時にまた牧師任命権法がジェントリによる教区牧師の選任権という共和主義的自治の伝統を解体するものだと、それに反対した。シャーフツベリ派の啓蒙思想はスコットランドの上流階級と知的エリートの好むものとなったが、自治の思想としての共和主義も知的エリートの思想として独自の発展を遂げていた。

いまだ穩健主義と文明化、世俗化は必ずしもスコットランドの民衆に歓迎されたとは言えず、民衆は上流階級と知的エリートたちのパトロネジを介して成長しつつあった世俗的文化・奢侈・洗練・社交的世界に、欲望と権力に溺れた腐敗・墮落を嗅ぎ取って、反発と拒絶、抵抗を示した。意外にも、貧困にあえぎながらも民衆はかえって精神主義的伝統に固執する傾向があったのである。やがて1740年代には、グラスゴウ近隣のキャンパスラングで、伝道師ホイットフィールドの説教をきっかけとして、福音主義的な熱狂的信仰回復運動が巻き起こる。それはアメリカ植民地でのジョナサン・エドワーズの信仰回復運動と連動していた。

ヒュームは牧師も法曹も目指さなかったから、大学にポストを得られなかったのは打撃であったが、しかし弁護士会図書館に職を得たことは図書館を渴望していたヒュームにとっては悪いことではなかった。やがて、ヒュームは、ハーフォード卿やコンウェイ将軍の恩顧を得て秘書と外交使節を努める。教授にならなかつたおかげで、国際政治の現場に接することができたわけで、それは政治社会思想家としてのヒュームの成長にとってはプラスであった。当時のス

コットランドでは、他の国と同じく、貴族に生まれない限りは、多かれ少なかれ、恩顧によらずには世に出ることは困難であった。競争と選抜は一部にはあったけれども、19世紀以降のようにそれが広く制度化された社会には程遠かったので、上流階級の恩顧はいわば必要悪だったのである。18世紀は未だ国民動員型の社会ではなかった。国民動員思想としてのナショナリズムは、すでにこの時代にも一部の国民を捉えつつあったが、しかしまだ恩顧が支配的な社会では、党派性が優位していた。

ヒュームは、サミュエル・ジョンソンのように、文筆での自立を目指していた。そしてそれは、最初は容易には達成できなかったとはいえ、結局のところそれに見事に成功した。思想界での地位もまた不動のものとなったけれども、敵もまた多かった。ウォーバートンやサミュエル・ジョンソン、ビーティなどがそうである。ハチスンやケイムズ、リードなども必ずしもヒュームをよく理解していたわけではない。フランスでは歓迎されたヒュームであるが、しかし、ルソーとの出会いによって、フランスの経験自体も陰惨なものとなった。ヒュームとルソーという稀有な個性の出会いが、邂逅とならず、不和に終わったことは、二人の思想の本質的な非和解性を物語るのか、それとも単なる個性の相違の帰結に過ぎなかつたのかという疑問は、にわかには決着がつかない。真のヒュームを追求する本論考ではこれもたんなるエピソードなのではない。

ヒュームは、前述のようなウィッグ政治家の恩顧を得たけれども、恩顧と党派を本来は好ましいとは考えていなかった。個人が自立して生きることができれば、それが最上と考えていた。ヒュームにとっては、恩顧も党派、政党も必要悪であった。ヒュームの党派嫌いは徹底したものであって、ヒュームはジャコバイトを断罪したが、他方モダン・ウィッグとしてのウォルポールの腐敗政治を弾劾する文章も書く。ヒューム

のウォルポール批判はその盟友であるアーガイル公爵の政治批判の意味も持ち得たであろう。ヒュームは党派の行き過ぎを弾劾した。それは公共の利益を損なう政治になりがちだという理由からであった。こうした認識は、ヒュームの現実主義的な鋭い社会認識の所産であった。そしてそれはヒュームの境遇と無関係ではなかった。

18世紀の大ブリテンは国内的には経済的繁栄を享受しつつも、対外的には半分は戦争に巻き込まれていた。前半にはジャコバイトの反乱もあったが、商業的繁栄と結びついたイングランド銀行の設立と公債の発行によって社会的利害関係が広く深く根を張るようになり、合邦（1707）によってスコットランドの馴致も可能になった結果として、国内市場は広がり、さらに植民地も成長して行ったから、商業社会が前代未聞も規模で大ブリテンに生成されつつあった。停滞的な伝統社会とは異なる原理を内蔵した新しい社会が生まれていたのである。それを消費社会と呼ぶべきか、商業社会と呼ぶべきか、ジェントルマンリー資本主義と呼ぶべきか、財政＝軍事国家と呼ぶべきか、論争が絶えないが、しかし、このような社会の変化を誰にもまして鋭くつかんでいた社会思想家の一人がデイヴィッド・ヒュームであった。

前世紀の宗教戦争の教訓から生まれたウェストファリア体制ははまだ崩壊はしなかった。それは少なくともヨーロッパ大陸内部での戦争の限定には一定の成功を示したであろう。しかし、それは、オーストリア継承戦争、スペイン継承戦争などによって、綻びを見せ始めていた。国際的な勢力均衡はそもそも危なっかしい原理であった。それは重商主義の貿易差額説にも似ていた。天秤が示すように、一国が決定的に優位になること自体が危険なのであったから、ブルボン家の潜在的脅威をいかに抑えるかに、当面の国際政策の眼目があることは、プロテスタント連合にとっては明らかであった。

プロテスタント連合もまた磐石ではなかった。イングランド、スコットランド、オランダ、ハノーヴァーという具合に、王室は繋がっていても、国民は新しい国王、ウィリアム王にもジョージ王にもさほど愛着をもてなかった。啓蒙思想家が国際的な連携をもったコスモポリタンであったとしても、地主利害と同じく商業利害も、少なくともイデオロギー上は国際的連携以上に国内的結束を重視するようになっていた。国民的産業が唱道され、国民的利害がスローガンになりつつあった。植民地獲得・植民地貿易は、国内問題と関連するとともに勢力均衡の国際政治原則とも連動していたが、ヨーロッパの外部での植民地獲得には拘束はなく、外部世界はヨーロッパにとっては自然状態であった。大ブリテンの海洋帝国案は着々実現に向かって進んでいた。

こうして、ヒュームの時代に先鋭になって行ったフランスとの植民地をめぐる覇権争いは、ブリテン帝国の形成を推し進めた。そして、英仏七年戦争（1756-63）は、ブリテンの勝利に終わったとはいえ、それは必ずしもブリテン帝国の繁栄に寄与することにはならず、むしろ本国の膨大な経費の投入にもかかわらず、逆にやがてアメリカ植民地の反抗（課税に反対）と離反（独立宣言）を招き、帝国の危機（独立戦争）を招来する。こうした事態もヒュームは北部担当次官としての経験もあって、例外的に相当的確に予測しえたのである。このような社会思想家としての慧眼を知らず、『人間本性論』の認識論だけに特化する哲学的分析はどのような意味を持ちうるのだろうか。

哲学者としての孤高の達成、政治経済学者としての先駆的な理論の提出、英国の歴史の深い分析、そして宗教についての先鋭な見解、どれを取ってみても、ヒュームは卓抜な仕事を残した。しかしそれぞれは屹立しているというのではなく、思想家ヒュームの変貌の産物でもある。そのヒュームという思想家の知の生成と変容

を、抽象的な哲学史や思想史として跡付けるのではなく、ヒュームの経験に即して、諸問題と諸コンテクストに即して解明すること、そうすることによって真のヒュームに迫ること、それがこの論考の目指すものである。ヒュームはその充実した人生において、多くの問題に直面し、格闘して、多くの知的成果を残した。その格闘の歴史にこそ真のヒュームの姿が示されている。思想史上の普遍問題にも、歴史的個別問題にも、ヒュームは鋭い分析を行った。画家のように対象を描写するのではなく、解剖学者のように、対象の構造を分析することによって、人間の科学と社会思想、そして文明社会の歴史において前人未到の世界にまで到達したのがヒュームである。

## 2. ヒューム家とナインウェルズ時代 (1711-1722)

### ヒューム家

まず、65歳でヒュームが自らの経験を回顧して記した『自伝』や『書簡集』、その他の研究文献を参照しながら、若きヒュームの思想形成を辿ってみよう。

スコットランド啓蒙の時代にあつては、スコットランドの知的エリートは、教授か、牧師か、法曹になるのが普通であつたし、ヒュームの抜群の能力を考えると、ヒュームが学問的地位を目指していながら実現しなかつたのは明らかに不運であつた。そもそもヒュームが2歳の頃に父を失つたことが、不運の始まりであつた。ケイムズの友人でもあつたヒュームの父ジョージフは、ケイムズと同じく法曹で「ジェントルマン・ファーマー」(紳士にして農業経営者)であつた<sup>8)</sup>。

この不世出の天才は、エディンバラから南東

数十マイル離れたボーダー地方のナインウェルズという村に生まれた。母キャサリン (Katherine, nee Falconer) と父ジョージフ (Joseph Home) との第3子であつた。ヒューム家は、伝統ある一族の傍系であつたが、ケイムズ卿とは姻戚関係であつた。父も母方の祖父も法律家であつた。

「私は、旧暦の1711年4月26日にエディンバラで生まれた。父方も母方も共によい家系の出身であつた。父の一家は、ホームないしヒューム伯爵の一分家であり、私の祖先達は、数代に渡り所領の所有者であり、この領地は今、私の兄が所有している。私の母は、法学院総裁サー・デイヴィッド・フォーコナーの娘であつた。ポーカントン卿の称号は、相続により母の兄弟に伝わつた。」(140)

ヒュームの記述は簡単で控えめであるが、ベリックシャーのヒューム家の所領は1138年に遡るから由緒ある家系であつた。ナインウェルズのヒューム家にまで下る系図についてはモスナーが詳しく述べている<sup>9)</sup>。

「父は才幹のある人間という評判であつたが、私の幼児期に死去し、一人の兄と妹もろとも、私は母の手に残された。母は奇特有難い婦人で、若く魅力的であるのもかかわらず、ひたすら自分の子供の養育と教育に献身した。」

母キャサリン・ヒュームはフォーコナー家 (Falconers) という王室にもつながりがある可能性のある由緒ある家系で、一族はキントールの伯爵であつた。キャサリンの父デイヴィッド・フォーコナー卿は、公職によって著名で、1661年に法曹になって以後、1676年には高等民事裁判所判事となり、6年後に総裁、1685-86年にはフォーファーシャー代表の議員を務めた。1681年から1685年の間、「高等民事裁判所判例集」を編纂している。彼の死後、二人目の妻で未亡人となつたメアリは、デイヴィッド・ヒュー

8) Mossner, *op. cit.*, p. 19.

9) Mossner, pp. 8-9.

ムの祖父と結婚した<sup>10)</sup>。

父ジョージフが他界して以後、母は再婚もせずに所領の管理をし、子供を育てた。モスナーの推定では、ナインウェルズの家には聖書や教理問答書や法律関係の本だけではなく、ギリシア・ラテンの古典、フランス書、シェイクスピア、ミルトン、ドライデンなどの選集や『タトラー』、『スペクテイター』、ポープなどがあつたとされる<sup>11)</sup>。ヒュームは幼いときから本が大好きであった。

ナインウェルズの所領は28人の借地人がいる程度の規模で、年192ポンドの貨幣地代と35ポンドの食料をもたらした<sup>12)</sup>。したがって、ヒューム家は、負債もあつたが、富裕ではなくとも「まずまず」であった。所領は兄が相続し、兄は地主経営者すなわち「ジェントルマン・ファーマー」として堅実な経営を続けた。

#### エディンバラ大学

ヒュームは兄と一緒にナインウェルズで家庭教師の個人教育を受けたあと、エディンバラ大学に1723年に入学した。この年には、エディンバラの対岸の港町カーコーディに、アダム・スミスが生まれている。スミスはやがてヒュームの最も信頼する友人となる。当時は通常そうであったが、ヒュームが大学に入学したとき、未だ12歳であった。

父ジョージフ・ヒュームは1697年にエディンバラ大学に入学し、ジョン・ロウ(John Row)のもとに登録した。ロウは優れたヘブライ語学者であったが、ロウが持ち上がり担任(リージェント)としてギリシア語、論理学、自然哲学、道徳哲学を父ヒュームに教えた。しかし、1708年からは、傑出したスコットランド教会の牧師でウィッグ政治家として著名な、学長カーステ

アズの指導によって、オランダのライデン大学やユトレヒト大学の制度に倣った、専門教授制度が導入されたのである。学問と芸術の基本カリキュラムにおいて、初年度には人文学(Humanity)の教授によってラテン語を教わることになり、1710年に登録が始まった<sup>13)</sup>。

二人は、学期中は大学に程近いローンマーケットの「家」に母と姉妹の4人で暮らした。ナインウェルズから40マイルの馬の旅は悪路なので大変だった<sup>14)</sup>。ジョン・マッキーによれば、「この大学で4年学べば学術修士が得られる」。学者たちは宿舎には住まず、イングランドのカレッジのような厳格な規則にも縛られず、ガウンも着ず、オランダのカレッジのように、街に住んで食事をし、午前8時から12時、午後2時から4時にかけていくつかの授業を行うことを求められている。「若者の教育から離れて、かくも多くの仕事と気晴らしに慣れきった街中の大学がいかにしてよい学者を生み出すのだろうか。」マッキーは疑問に思った。大学の建物は救貧院のようにみすぼらしく、街は誘惑に満ちていようと、エディンバラ大学はよい学者を出していた。1582年創立の、スコットランドで一番新しい大学であるが、1722年には文句なしに最も高い名声を得ていた。それは1708年に導入された担任持ち上がり制度(regentship)から専門教授制度への変革に負っていた。この変更はグラスゴウでは1727年、セント・アンドルーズでは1747年、アバディーンでは1754年であった。

兄弟が入学した1723年には人文学の教授はローレンス・ダンダス(Laurence Dundas)であった。第二学年はギリシア語教授ウィリアム・スコット(William Scott)がもち、三年目の授業はコリン・ドラモンド(Colin Drummond)教授によって論理学と形而上学が教えられた。

10) Mossner, pp. 26-27.

11) Mossner, p. 30.

12) Mossner, p. 23, 27.

13) Mossner, p. 38.

14) Mossner, p. 35.

そして最上級の自然哲学の授業はロバート・ステュアート (Robert Stewart) 教授が教えた。以上は正規の授業であるが、ジェイムズ・グレゴリは数学、ウィリアム・ローが倫理学、チャールズ・マッキーが歴史を教えることがあった。それ以外に個人授業もあった。そして市民と学生と一緒に参加できる公開授業もあった。それは毎年行われた一連の講義で、教授全員が担当した。

教授制度になったことで学位を取得する学生の比率が少なくなった。旧制度では担任教師はできるだけクラスの人数を多くしようと、財政的にも努力し、競ったが、新制度では自然哲学教授だけが卒業手数料を受け取ったに過ぎず、競争がなくなり、学生も学位を取りたがらなくなった。しかし、この制度は大学のレベルを引き下げたり、学生の勉学意欲を損なったりしたわけではなく、むしろ逆であった。前述のようにヒューム兄弟は1723年に大学に登録をした。デイヴィッドは2月、ジョンは3月に行っているが学期は10月から始まった<sup>15)</sup>。

教養課程で学んだヒュームは法曹の家系であったから法学に進むことを期待されていたが、法学には進まず、また大学も中途退学(14, 5歳)した。1726年の春いっぱいには在学していたと推定されている。ヒュームは、グラスゴウ大学におけるハチスンにとってのカーマイケル、スミスにとってのハチスンのような、師を見出すことはできなかったのであろう。ヒュームは1726年にシャーフツベリの『特徴』三巻(第三版, 1723)を入手したことが分かっている<sup>16)</sup>。

「私の家族は富んでいなかった。そして私自身は弟だったので、相続財産は国の慣習にしたがって、非常にわずかであった。」長子相続制の下では次男以下の相続財産はわずかであったが、モスナーの推定では、相続財産から年50ポ

ンド以上の収入があったらと言う<sup>17)</sup>。学生生活に55ポンド余りかかったので、ヒュームは収入以上の生活をしてきた。ヒュームは後1734年にフランスのライムでの生活に80ポンドかかると記している。

「私は通常の教育課程を良い成績で終えたが、きわめて早くから学芸に対する情念に捉えられた。学芸こそ、私の生涯を支配した情念であり、私の楽しみの大きな源であった。私の物事に熱中しやすい素質、生真面目さ、そして勤勉さのために、家族は、私には法律が適した職業だと考えるようになった。しかし、私は哲学や一般的な学問の探究以外のすべてに対して克服できない嫌悪感を抱いていた。こうして私がヴォエティウスやヴィンニウスを熟読していると家族が想像している間に、私が密かに耽読していた作家はキケロやヴェルギリウスであった。」

### 3. エディンバラ大学時代のヒューム (1723-1726)

ヴォエティウスやヴィンニウスとは法学者であるが、ヒュームは法学の勉強には身が入らず、文学と哲学にのめりこんでいた。それではヒュームはエディンバラ大学にいた3年ほどの間に、実際に何を学んだのだろうか。

ノートンによれば、ヒュームは、ラテン語文献を読み、ギリシア語を学び、知識理論を含む論理学、自然宗教を含む形而上学、道徳心理学と情念論を含む道徳哲学を学ぶことを期待されたであろうし、おそらく数学の初歩と世界史を学んだ。またロバート・ボイルの著作を参考にして構築された自然哲学の講義と実験に出たと考えられ、そうした授業でヒュームは科学の広範な書物を知ったであろう<sup>18)</sup>。

モスナーはより詳細に説明している。まず、ギリシア語のウィリアム・スコットであるが、

15) Mossner, p. 39.

16) Mossner, p. 31.

17) Mossner, p. 25.



彼は1695年に担任教師になったが、1707年にギリシア語の教授となった。かれの教授就任から教授制度の拡充をカーステアズ学長は行った。1706年からスコットは自然法と国際法の講義をしており、1729年には倫理学の教授に転じた。スコットは個人授業で使用するために、道徳哲学の標準的な教科書となっていたグロティウスの『戦争と平和の法』の縮約版を作っており、ヒュームはグロティウスからたくさんの考察すべき問題を学んだであろう<sup>18)</sup>。モスナーはこのように推定しているが、若き日のヒュームの『覚書』には自然法学者の著作はほとんど登場しない。もちろん、グロティウスをヒュームが知らなかったとは考えられないし、モスナーの推論はおそらく正しいと思われるが、若きヒュームが自然法思想にどの程度の関心を持ったかについては、疑問の余地があると思われる。

ヒュームはギリシア語についてはこの時期に熟達まで行かなかった。ヒュームは『自伝』で『人間本性論』の刊行後、ギリシア語の知識を取り戻したと書いている。

1724年にコリン・ドラモンド教授からヒュームは論理学と形而上学を学んだ。「新哲学」に関心の深かった教授は4年後に出版されるヘンリー・ペンバートン (Henry Pemberton) の『アイザック・ニュートン卿の哲学の展望』を予約した6人のエディンバラの教授の一人であったから、講義でもニュートンとロックを取り上げたかもしれない。彼はこの時期のスコットランドの大学の論理学教授がたいいそうであったように、修辞学と美学 (文芸批評) も扱った。(1729年に後継者となったジョン・ステイーブンスンはこの分野で成功をおさめ、アリストテ

レスの『詩学』とロンギヌスの『崇高について』を論じて人気を博した。)<sup>20)</sup> ドラモンドからヒュームはこの分野の知識へと導かれた。アリストテレスの『詩学』とロンギヌスの『崇高について』を講義で聞かなかったとはまず思えない。

自然哲学はロバート・ステュアート教授が教えた。彼は、最初はデカルト主義者であったが、後にニュートン主義者になった。1741年の『スコッツ・マガジン』の記事によると、彼の講義では光学と天文学を含む物理学の新しい発展が力説され、ニュートンとその弟子の著作を用いていた。受講生には少なくとも大学の数学の1年の授業を学んでいることが要求されていた。これは1741年のことで、1725年については分からない。彼は前出のペンバートンの本を予約している。ヒュームはこの講義からニュートン物理学の主要な特徴と内実を学んだであろう。そしてそのニュートン主義はヒュームの知的発展にとって極めて大きな役割を果たすことになる<sup>21)</sup>。

数学教授は有名なグレゴリー族のジェイムズ・グレゴリーであった。父もエディンバラで1674年から翌年にかけて数学を教えた。息子のデイヴィッドが1683年から91年まで数学講座に就いていたが、オックスフォードの天文学のサリヴァン教授となってこの年に赴任した。その後継がジェイムズであった。ジェイムズもニュートン主義を継承していたが、それは

20) Mossner, p. 42.

21) Mossner, pp. 42-43. スコットランド啓蒙へのニュートン主義の浸透は広範であった。しかし、ダンカン・フォーブスはニュートンと対決したイングランドのハチンソン (John Hutcheson) の宗教思想の影響を受けてニュートンを否定し、ケイムズ、モンボッドら法曹もまたニュートン主義を退けた。Paul Wood, "Science in the Scottish Enlightenment," *The Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*, Cambridge U. P., 2003, p. 104.

18) David Fate Norton, "An introduction to Hume's thought, in *The Cambridge Companion to Hume*, Cambridge U. P., 1993, p. 2.

19) Mossner, pp. 41-42.

ニュートンが『自然哲学の数学的原理』を刊行した直後にデイヴィッドによって授業に取り入れられていた。ケンブリッジ以外では、エディンバラがニュートンの原理を教える最初的高等教育機関であった。1720年までに加齢もあってグレゴリは病気となり、1721年から22年にかけては代行者としてロバート・ウォレスが講義をしたが、ウォレスは後にヒュームの友人で擁護者となった。1725年にグレゴリは退職を余儀なくされたが、生涯、称号と給料は確保したらしい。

その後はコリン・マクローリンが継いだ。アバディーン大学からのこの転任人事はアイザック・ニュートンの個人的指名によるものであった。ニュートンの初期の弟子のなかで最も有名であったマクローリンは「新哲学」を英語で表わした教科書を用いて敷衍して教えた。ヒュームは、グレゴリか、代行者か、マクローリンからニュートン主義を吸収したであろう<sup>22)</sup>。モスナーは数学との関係でこう記しているが、23年入学のヒュームがグレゴリにもウォレスに学ぶことはありえなかったから、コリン・マクローリンに学んだのであろう。ヒュームの手紙にマクローリンが登場するのは、1746年のケイムズ宛の手紙のなかに1度あるだけで、マクローリンの後任にジョン・ウィリアムスンが推されていると彼から聞いたという内容である<sup>23)</sup>。

選択授業に「精神的、倫理的哲学」があり、ウィリアム・ロー教授が担当していた。ローも、ペンバートンのニュートンについての本の予約者であったが、その授業内容などは不明である。モスナーは、後任のプリングルの概要から推定している。この授業は、後任のジョン・プリングル (John Pringle, 1707-82) の1729年の概要によれば、4部に分かれており、1. 感覚では感知できず、その作用を通じてのみ知られるよ

うな精妙な実体と物質的実体の形而上学的研究、2. 魂の不滅の証拠、3. 物質と関係のない非物質的な被造物の本性、4. 自然神学、すなわち神の存在と属性の論証となっている。

プリングルからヒュームは学んだわけではないが、参考にはなると、われわれもモスナーと共に考えることができるだろう。精神学 (Pneumatics) はヒュームには毒となったとしても、道徳哲学は栄養になったであろう。プリングルは、道徳哲学の理論において古代人ではキケロとマルクス・アウレリウス、近代人ではプーフェンドルフとベイコンから教科書を選んだ。実践的部分 (実践倫理学) においては、「市民政府の起源と原理」を明らかにし、「ギリシアとローマの古代の統治の盛衰の説明で例証」するとともに、「北方の諸国民の侵入から興った統治形態の展望」を行った。プリングルの学生は与えられた主題に関して公開で報告を行うことを求められた。プリングルは法学教授の主題と方法を継承した可能性が大きく、このような講義がヒュームの時期にも行われていたのではないかと、モスナーは想定している。20年ほど後になって、ヒュームはプリングルの後任候補となるが、成功しなかった。しかし、プリングルはヒュームの主治医となり友人となった<sup>24)</sup>。

モスナーは『スコッツ・マガジン』のヘンダーソンの論説に依拠しているが、年代などが間違っている可能性がある。他の文献 (DNB など) によると、1729年にはまだライデンで勉強中だったように思われる。プリングルがライデン大学で修士学位をとったのは1730年であり、その後、エディンバラに医師として戻った。大学の精神学と道徳哲学の教授を務めたのは1734年から1744年である。1742年には、フランダースに派遣されたプリテン軍の総司令官となったステア卿 (Lord Stair) の従軍医師に任命され、エディンバラを離れた。1744年に教授

22) Mossner, p. 43.

23) Hume, *New Letters*, Oxford U. P., 1954, p. 21.

24) Mossner, pp. 43-44.

を辞任し、フランダースの軍隊の軍医総監となる。カンバーランド公爵とともにイングランドに帰国し、1746年のカロードンの戦い（ジャコバイト掃討作戦）に参加した。1748年にはロンドンに住み、1763年に王立医学協会員、1766年には男爵位を授与され、1774年には国王ジョージ3世の侍医となった。学者社会で影響力のある地位を確立したプリングルは、1772年には王立協会の会長に選出された。軍隊の衛生と医療の改革で功績があり、『軍隊の疾病の考察』（1752）はヨーロッパ中で名声を博し、軍事の古典となった。

1722年にエディンバラ大学には3講座の新設が認められた。市民法、スコットランド法、歴史がそれである。厳密に言えばスコットランド法だけが新設であった。教授の俸給はエール税に求められた。議会がエディンバラ市に対して、市と近隣で醸造されたエール1パイントにつき2スコットランド・ペンスの課税を認め、それが教授の年俸100ポンドの財源となった。カーステアズの義理の兄弟であるチャールズ・マッキーが普遍史（世界史）の教授に選ばれた。この講座は後に普遍史とスコットランド史に拡張された。マッキーはエディンバラ大学を卒業し、オランダに留学してフロニンヘンとライデンで法を学び、帰国後、法曹となっていた。マッキーは古代ローマ史と普遍史の二つの授業を行い、成功した。普遍史では、歴史の発端から近代史まで講義し、たとえばローマ帝国衰亡史、歴史と歴史叙述、スコットランド史のほかに、文学史、作家の生涯、美文学、文芸批評、美学なども講じたから、学生に人気があった<sup>25)</sup>。

マッキーの授業にヒュームが出たかどうか、モスナーは不明としている。マッキーは1719年から1744年の間の歴史と古代ローマの講義に出た学生の記録を残している。年々約30名の学生が出ているのは、必修でない科目として

は多い。1725年から26年の記録にデイヴィッド・ヒュームの名前がある。しかし、これは「エディンバラのクラーク・ヒュームの息子」と記しており、マッキーほどの注意深い記録者が間違うとは思えない、とモスナーは推定している。しかし、マッキーが間違えた可能性はあるかもしれない。

マッキーの授業に出ていた学生の名前が分かっているのは有益である。エイケンサイド（Mark Akenside）、ブラックロック（Thomas Blackloch）、ボズウェル（Alexander Boswell、ジェイムズ・ボズウェルの父）、デンプスター（George Dempster）、ギルバート・エリオット（Sir Gilbert Elliot）、ガーデンストーン（Lord Gardenstone）、ジョン・ヒューム（John Home）、ジョンストーン（James Johnstone of Westerhall）、キース（Robert Keith）、ミッチェル（Sir Andrew Mitchell）、オズワルド（James Oswald Dunnikier）、ロバートスン（William Robertson）、スティーヴンソン（John Stevenson）。ヒュームは、このうちの何人かとも多かれ少なかれ、交流したであろう。

この時期の学長はウィリアム・ウィシャートであり、学長の職務の一つに学生の討論指導があった。学期始めに大ホールに学生を集めて討論をさせるか、作文を読ませるのである。基本的にラテン語ということになっていたが、英語も認められたようである。ヒュームの草稿の中に8ページの未完成の英語による「騎士道と近代の名誉の歴史論」というものがあり、これはそのためのものかもしれないし、マッキーの歴史の授業で書かれたものかもしれない。その他の授業のためのものかもしれない。啓蒙の時代に標準的なもので、真の古典的徳の墮落と偽りのゴシック的騎士道の興隆を描いている。歴史的事実の哲学的心理学的分析という方法はヒュームの方法そのものである。その要約は1762年に刊行された『イングランド史』の付録にある。モスナーはこの作品にすでに成熟した

25) Mossner, pp. 44-45.

思想を見て、一部を引用しているが、優れたエッセイであり、賞を取ったかもしれないと言う<sup>26)</sup>。

#### 4. ランケン・クラブ

この時期のエディンバラには「ランケン・クラブ」Rankenian Club (1716?-74) という集まりがあった。居酒屋の主人の名前にちなんでこう呼ばれていたが、このクラブは文芸・思想のクラブで、1716年か17年に結成された。やがて社交団体としてのこの種のクラブ、文芸クラブ、あるいは討論クラブは、エディンバラ、グラスゴウ、アバディーンなどの各地に、いくつもある。エディンバラ哲学教会 (1737-83)、グラスゴウ文学教会 (1752-80?), エディンバラ選良協会 (1754-63)、アバディーン哲学教会、別名「賢人クラブ」(1758-73)、グラスゴウの経済学クラブ、エディンバラのポーカー・クラブなどが有名である。それぞれ目的や会の性格などに違いがあったが、しかしながら、啓蒙の「改良精神」を体現したこうしたクラブは、若い知的エリートとジェントリの集まりという共通の特徴をもっていた。そうした流れのなかでランケンは先駆的であった。

父を継いで後に会員となったジョージ・ウォレス (ロバート・ウォレスの息子で法律家) が作成した名簿によれば<sup>27)</sup>、会員は23名で、教授6名、聖職者7名、法律家7名<sup>28)</sup>、以上で20名を占めているから、まったくの知的エリートの

会であった。メンバーは、正しい英語の文体、健全な文芸の趣味、思想の自由などを求めている。学長ウィシャート、マッキー(歴史学教授)、マクローリン(数学教授)、画家ジョン・スミバート (John Smibert)、ステイーヴンソン(論理学教授)、アバディーン大学のリージェントであったターンブル (George Turnbull, 道徳哲学者)、穏健派牧師ウォレス (Robert Wallace) などが初期の会員で、後にアレグザンダー・ボズウェル(法律家)、医師のアレグザンダー・カニングカム (Alexander Cunningham, 後にプレストンフィールド所領を相続し、サー・アレグザンダー・ディックとなるとともに王立医学会会長も努めた)、アンドルー・ミッチェル (Andrew Mitchell, 後年プロシア大使)、ジョン・プリングル(道徳哲学教授、医師) が加わった。この会は60年間続いたが、学部生は入会を認められなかった。ヒュームは会員ではなかったが、しかし、その後には多くの会員と交流することになる。

ジョージ・ウォレスは会の貢献をこう述べている。「ランケンの会員たちは、思想の自由、探求の大胆さ、感情の寛大さ、推理の正確さ、趣味の正しさ、文章構成への注目を、スコットランドに普及させることに大いに貢献したのであり、また文芸界において現在スコットランドが占めている高い地位は、この集団によって始められた習慣と精神によるところが大きい。」<sup>29)</sup>

彼らはユニークな観念論哲学者であったパークリ主教 (George Berkeley, 1685-1753) と手紙を交換し、パークリの思想を基本的に支持していた。しかし、なぜ彼らがパークリの支持者となったのかは、よく分からない。パークリの『人間の知識の原理』は1710年に出た。それから数年を経過した1716年にランケンは発足

26) Mossner, pp. 46-48. 全文は Mossner, "David Hume's 'An Historical Essay on Chivalry and modern Honour'," in *Modern Philology*, XLV (1947), pp. 54-60.

27) Alexander Fraser Tytler (Lord Woodhouselee), *Memoirs of the Life and Writings of the Honourable Henry Home of Kames*, 2 vols., Edinburgh, 1807, vol. 1, Appendix VIII, pp. 50-52.

28) 篠原久『アダム・スミスと常識哲学』, 有斐閣, 1986年, 17ページ。

29) George Wallace, "Memoirs of Dr Wallace of Edinburgh," *Scots Magazine*, XXXIII, 1771, pp. 340-41. 篠原久, 前掲書, 18ページ。

しているのに、数年間の経過というのは、書物の評判が確立する時間としては、適当であるように思われる。イングランドとの合邦（1707）、エディンバラ大学の改革（1708）、牧師任命権法（1712）、ハノーヴァ王位継承（1714）、合邦と王位継承に反対するジャコバイトの乱（1715）といった出来事に関心を持たざるを得なかった若者たちは、自らの拠って立つ新しい哲学を必要としていたであろう。彼らはそれぞれの専門分野において諸科学を推進しようとしていた。したがって、彼らは諸科学の基礎ともなるような確固たる哲学が欲しかったと思われる。それはもはや神学が与えるものではなかった。

そうだとすれば、それは一世代後の、「人間の科学」を求めたヒュームにも見られる関心である。ヒュームもやがて自らの自信作『人間本性論』に関するパークリの批評を求めるであろう。パークリはスコットランドにおいて、そのような名声を確立しつつあったように思われる。おそらくパークリの『原理』の出版（1710年）は時宜に適っていた。ターンブルなどは理神論者のトランド（John Toland）と文通していたが、トランドには人間哲学はない。シャーフツベリの『人間、習俗、意見、時代の特徴』は1711年に出た。そこには社会的感情（モラル・センスはシャーフツベリが用いてハチスンに伝えた概念である）に注目した新しい合理主義的な道徳理論があった。しかし、若者が渴望していたのはロックの『人間知性論』のような哲学的な認識の基礎を提供する著作であった。

人間の能力の科学的な分析の基礎を与える著作として、パークリの『人間の知識の原理』は格好のテキストであった。彼ら、ランケンに集まった若者たちは、ロックの『人間知性論』を継承する経験主義的認識論として、新しい人間と社会の基礎理論となる可能性をパークリに見たのではないだろうか。「北ブリテンのこの一団の青年紳士たち以上に、私の体系をよく理解したものはいない」とパークリは述べたと伝え

られている。

パークリの言葉が正しければ、ランケンたちは、パークリの政治論や経済論、あるいは説教集などではなく、経験主義的な観念論哲学に関心を持っていたということであろう。パークリは1725年に企画したバミューダでの大学建設（missionary college）に彼らを誘った。しかしながら、クラブはこの空想的な計画に乗り気にはならなかった。パークリの空想的な、ユートピア的な側面は、彼らを惹き付けなかったけれども、18世紀アイルランドの最も有名な哲学者が、いずれにせよ、スコットランドで理解され始めていたことは確かである。

1728年にパークリはロード・アイランドに出发した。そのときには、ランケン・クラブの会員のなかから肖像画家のスミバートが同行した。航海中には、彼はパークリの探検の肖像画を描いたが、ロード・アイランドのバミューダ・カレッジが失敗したとき、スミバートは、帰国せずに、結婚してボストンに住み、植民者の肖像画を描いたり、建築のデザインをしたりして暮した。彼のことは、後にアメリカの「自由のゆりかご」として知られるようになった、と言われる<sup>30)</sup>。

この会にアバディーンからターンブルが参加していることは興味深い。ターンブルはハチスンと思想傾向が近く、シャーフツベリの哲学から多くの示唆を受けると共に、モールズワースなどのコモンウェルスマンの政治思想（共和主義）の影響を受けていた。ランケン・クラブはターンブルを通じてグラスゴウとアイルランドのモールズワースの弟子たちとつながりがあった<sup>31)</sup>。パークリは1712年に『受動的服従』を刊行したので、ジャコバイト説もあったが、少な

30) Mossner, pp. 48-49.

31) Haakonssen, p. 84 and note. M. A. Stewart, "Berkeley and the Rankenian Club", *Hermathena*, 139 (1985), pp. 25-45.

くとも 1715 年以降はもはやジャコバイトではなかった<sup>32)</sup>。またランケンの会員はジャコバイトではありえず、必ずしも政治的に能動的ではなかったように思われるが、ウィッグであったことは否めないであろう。ジャコバイトは少なくとも表向きは公職から排除されていた。

クラブの主要メンバーであったエディンバラ大学の教授たちの強い文芸趣味は、ヒュームの趣味とも合致していたから、会員にはなれなかったとしても、講義などを通じて、ヒュームにいつその影響を与えたかもしれない。また彼らの強い哲学的傾向は、ロックとニュートンの「新哲学」へとヒュームの注意を向けさせたかもしれない。シャーフツベリはロバート・ウォレスによって受け入れられたし、バークリはみんなが知っていた。また彼らにクラーク、マンデヴィル、ハチスン、バトラーが知られていなかったとは思えない。オホタタイアのラムジーは述べた。「1723 年から 1740 年にかけて、聖職者と俗人の、エディンバラの知識人には形而上学の問題ほど求められたものはなかった。形而上学の問題を彼らは神学論争や政治論争よりもより楽しい主題と見なした。そのときまでに人々は神学論争や政治論争にうんざりしていたのである。」<sup>33)</sup>

1725 年にローンマーケットの家が火災にあったために、いったんヒュームの家族はニンウェルズへ戻らなければならなかった。しかし、一家は冬季にはエディンバラで過ごしたので、新しい家を確保したように思われる。ヒュームが大学を中退した理由の一つはこの火災にあったのではないかとモスナーは推定す

る。ヒュームはよい図書館を渴望していた。エディンバラ大学図書館の 13000 冊のほとんどは書庫にあり、読書室は、冬は 2 時間、夏でも 4 時間しか開かなかった。貸し出し冊数もわずかであった。ヒュームの知的好奇心は満たされなかった。信仰は間違いなく失われつつあった。ロックとクラークを読んでから信仰を抱いたためしがないと、ヒュームは晩年にボズウェルに語ったらしい。ロックとクラークについての講義は大学で聞いていたが、後に自身で読んだであろう。ロンギヌス『崇高について』も講義で聞いた後、ヒュームは自身で読んだ。こうして大学を中退したヒュームはいよいよ哲学と文学の世界にのめりこんで行った<sup>34)</sup>。

ヒュームは晩年の手紙に書いた。「わたしに子供があつたら、ジェイムズ王が息子に女の危険な誘惑に気をつけるように警告したのと同じように、文学の危険な誘惑に注意するように警告したであろう。もっとも、彼の性向がわたしの若いときと同じほど強ければ、どの道、警告したところであまり効果はなかったであろう。」<sup>35)</sup>

ヒュームが大学を中退したのは珍しいことではなかった。当時の多くの学生は学位を取らなかった。大学を離れたヒュームは、しかしながら、学問をやめたわけではなく、むしろ逆であった。ヒュームは、郷里とエディンバラで、妻まじりまでの集中力を発揮して学問に没頭した。ヒュームがどのような図書館を利用したのかははっきりしない。ヒュームは蔵書を充実させようとしたが、未だ十分な本を持っていたとは思えない。猛烈な勉強で疲れたヒュームは、1729 年から翌年にかけて (18, 19 歳) 精神的危機を迎えた。

32) David Berman, *George Berkeley, Idealism and the Man*, Oxford: Clarendon Press, 1994, p. 94.

33) Ramsay of Ochtertyre, John, *Scotland and Scotsmen in the Eighteenth Century*, ed. A. Allardyce, 2 vols., Edinburgh and London: William Blackwood, 1888, Vol. I, pp. 195-96.

34) Mossner, pp. 49-51.

35) Hume, *Letters*, Oxford U. P., 1932, Vol. I, p. 461.

冷静に考えて、ヒュームは学問に打ち込める条件はないと思ったらしい。また勉強による健康問題も生じたので、ヒュームは「活動的人生」に転じようとする。「活動的生活」は「瞑想的生活」とともに、アリストテレス以来、よき生活であった。1734年に23歳になったヒュームはプリストルで数ヶ月商業の見習いをしたが、まったく不向きであることがすぐに分かり、やがてフランスへ渡る。この間の事情は、いくぶん詳しく、1734年におそらく医師アーバスノット<sup>36)</sup>へ書いたと思われる手紙の下書きに述べられている。ヒュームは医師に健康問題を相談していた。医師が適切な診断を下せるように「ある種の自分史」を語っている<sup>37)</sup>。

#### アーバスノットへの手紙

幼児期から学問に強い嗜好があった。スコットランドでは、語学教育に終始するカレッジの教育は14、15歳で終了し、ヒューム自身もその後は自由に読書を進めた。ヒュームは、哲学と文芸という二つの分野に関心があったのだが、どちらの分野でも果てしない論争が続いていて、最も基本的な事柄でさえ確立していないことを知った。大いに勉強したヒュームは、およそ18歳の時に「思想の新情景」が開かれたように思った。こうして彼は「学者、哲学者」の道を目指した。数ヶ月は幸せであったが、1729年の9月初め頃に、突然、自分の気力が消滅してしまった。本を手放しても不安にならなくなっ

た。身体的な不調があるようにも思えず、熱意が冷めたのは怠惰な気質のせいだとも思えなかった。ヒュームは、キケロ、セネカ、プルタルコスなどの多くの道徳の書物を読み、徳と哲学の見事な姿に魅せられ、自らの気質、意思、理性、理解力の向上に努めた。「死、貧困、恥辱、苦痛その他の人生の苦難」に常に対処できるように反省を続けた。「活動的生活」においては、これは極めて有益であるが、孤独な生活では、これは精神をすり減らすだけであった。そのことをヒュームは、経験してみても、健康でなくなると、はじめて知った。

ヒュームはさらに、運動やワイン、薬を試したことなどを綴っている。また自己分析して自分の症状は神秘主義者の著作に出てくる精神の冷却に似ているとも書いている。そして「研究と怠惰」が自分の健康には悪く、「実業と娯楽」がよいと考え始め、旅行教師か商人かに職業は選択は限られると思ったが、しかし、前者は自分の経歴からして無理なので、後者に決めたと述べている。こうしてプリストルへ向かう途中、ロンドンに来たのだが、果たして自分の病気は直るのかどうか、博士のアドバイスが欲しいと締め括っている。

アーバスノットからは、過度の集中による疲労が原因だから、そのうち回復するという回答をもらった。こうして、ヒュームは、海を越えることになる。

36) Norton, "Introduction" to his ed. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Oxford U. P. 2000, p. 110.

37) ヒューム書簡集の編者のグレイグは、医師ジョージ・チーン (George Cheyne) に当てたものであろうとしたが、ノートンはアーバスノット宛としており、これが正しいと思われる。

38) David Fate Norton ed., *The Cambridge Companion to Hume*, Cambridge U. P., 1993, pp. 345-350.